

入江長八と大分に残る鍔絵

第2回 日出（ひじ）周辺の鍔絵

東京都立大学 プレミアム・カレッジ 本科・専攻科修了
一級建築士 立川 公彦

1. 大分に残る鍔絵

今回から2回にわたり、大分県に残る鍔絵をご紹介します。大分県の鍔絵は日出（ひじ）を中心とする地域と、安心院（あじむ）・院内を中心とする2つの地域に、その多くが存在しています。



↑ 図1 鍔絵が多く残っている地域（大分県北部）

日出は、国東半島の南端、別府湾の北側に位置します。江戸時代は日出藩と称し、瀬戸内の港町で栄えた三万石余りの城下町でした。江戸後期には幕府の公役や参勤交代などの出費のため、困窮した状況で廃藩となりましたが、明治初めから養蚕や製糸業が上向くことで急速に発展しました。江戸の日出藩出入り左官棟梁の弟子として修業を積んだ青柳鯉市が帰藩し、普請作業方の職人として働いた後、明治には町場左官として活躍を始め、日出、杵築や山香に鍔絵を残しました。青柳鯉市が江戸で流行していた入江長八の鍔絵を日出に伝え、安心院地域の左官に広がっていったというのが地元での定説となっています。

一方、安心院・院内（両院）は、北側を宇佐に接

し、東の山向こうは山香や日出に続いています。両院は古代には宇佐との色濃い歴史を重ねていました。明治維新以降は、副業的に始まった養蚕に力を入れるようになり、村々は発展しました。明治後期から大正期にかけて最盛期となり、養蚕業の現金収入が村を潤し、新築された建物には鍔絵が施されました。鍔絵には腕の良い左官の存在が欠かせません。その頃、両院では長野鐵蔵を中心に山上重太郎や佐藤本太郎などの左官が活躍していました。また、海産物で栄えた長洲にも鍔絵が残されています。長洲に近接した金屋地区には、南喜一を中心とする有力な左官の集団がいました。

2. 日出とその周辺の鍔絵

■猿三番叟（日出）明治20年



↑ 図2 制作：青柳鯉市（49歳）

2つの六角形の枠の中に、それぞれ青地に赤い衣装の猿と白地に青い衣装の猿が描かれています。設置されているのが馬屋ということで、馬の守り神の猿を画題したと考えられます。色は退色がなく、今でも鮮やかさを保っています。大分の鍔絵の第一人者とされる青柳鯉市の作品です。普請の墨書き板札

があり、工事の期間や内訳など貴重な記録が残されています。「大分の鍔絵習俗」(※1)では、明治18年制作とされていますが、墨書き板札によると明治18年は着工で、明治20年2月が上棟との表記があることから、外壁の鍔絵の制作時期は乾燥や養生期間を考慮すると、早くも明治20年の年末から明治21年の春と考えられます。

■亀と波(日出) 明治38年



↑ 図3 制作：青柳鯉市(67歳)

波に浮かぶ亀が画題です。波は水を表し火事除けの願い、亀は長寿の願いが込められていると考えられます。亀の尾は退色がなく今も鮮やかですが、甲羅部分は表面着色が退色しています。青柳鯉市の晩年の作品で、亀も波も鍔裁きは滑らかで熟練度が高い作品です。建屋の持ち主のお話では、青柳鯉市は日出から伊豆に出向き、入江長八に直接教を乞うたという話が伝わっているとのことでした。

■高砂・日の丸・アカンサス(杵築) 明治22年



↑ 図4 制作：青柳鯉市(51歳)・青柳長市(16歳)



↑ 図5 【高砂】

屋根や外壁は修繕しているようで、色鮮やかさを保っています。高砂の画題は、夫婦円満と長寿の願いです。コーナーのアカンサスに比べて高砂の鍔絵は鍔裁きの拙さが目立ち、紙粘土で盛り上げたような印象です。敢えてその表現方法を取ったとも考えられますが、鯉市が若い長市に描かせた可能性があります。明治40年代に入って、長市は山香町に【巻物に高砂の爺婆】を残していますが、鍔裁きなどの技巧は著しく進化しています。

■雲龍(山香) 明治20年



↑ 図6 制作：青柳鯉市(49歳)

舞い降りる龍と雲が、練り込み技法の彩色で描かれています。若干の退色は見られますが、135年も経過したものとは思えません。丁寧な鍔裁きで龍の鬚や鱗、波打つ雲が表現されており、妻壁の設置場所から前面の道路にいる者を睨む構図となっています。

※1 文化庁発行『大分の鍔絵習俗』平成24年

〈次回は安心院とその周辺の鍔絵をご紹介します。〉